



マスコットキャラクター
「たねっこ」

種まき通信

第34号 編集・発行：田根地区・地域づくり協議会（愛称：種まき塾）
2021.3 〒526-0273 長浜市高畑町 316-1 田根まちセン内 Tel 74-1450

皆様には、田根地区・地域づくり協議会（種まき塾）の活動に格段のご理解・協力を賜り誠にありがとうございます。

今年度は、新型コロナウイルスに世界中が翻弄された一年でした。様々な行事を、実施するかどうかから考える必要があり、田根地区においても、皆さんの命を守ることが第一と考え、例年実施してきた様々な行事を中止せざるを得なくなりました。

皆様方のご協力に感謝申し上げます。

さて、今年一年間で、田根地区の戸数が何と五戸も増加しました。高齢化が進んでいる田根地区としては驚異的なこと、そして素晴らしいことだと思います。

種まき塾で取り組んできた、「空き家ネットワーク化事業」や「田根・坐・ガーデン」等の取り組みが、陰に陽に少しずつ成果となって表れつつあるのではないかと思います。

新型コロナウイルスは、私たちに今までの生活様式を根底から考え直す必要性を迫りました。

このことは悲観的にも思えますが、むしろこのピンチをチャンスととらえることの方が大切であると考えます。

ピンチはチャンス！

令和二年度 田根地区・地域づくり協議会

会長 三上 保彦



最近、感染リスクの高い「都会暮らし」を避け、「田舎暮らし」の良さを見直す人が出てきています。また、ネット回線さえつながっていれば、世界中の誰とでもコミュニケーションが取れ、どこへでも情報発信できる世の中でもあります。

このような人々の意識の変化を上手につかみ、ICTの技術を駆使することによって、田根地区が日本一の田舎となることも夢ではないと思います。

大きな夢を見て、活動は足元を見ながら行うことが大切です。今後とも、種まき塾への積極的なご参加・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

東京大学フィールドスタディ型 政策協働プログラム

昨年実施した「森のほとり
で職人の技を学ぶ」体験型
交流事業」の一環で、和歌山
県加太地区を視察しました。
加太地区では、まちづくり
会社を設立して東京大学と
ともに次のような地域活性化事
業に取り組まれていました。



地域ラボ・東京大学川添研究室

平成二六年

東京大学生産技術研究所・川添
研究室が現地調査を開始

平成二七年

「加太まちづくり会社」を設立

平成三〇年

川添研の分室・地域ラボを開設
(蔵を改修)

川添研の院生一四人が一週間滞
在し、調査・提案

東大助教一名が常駐開始

令和元年

交流拠点レストラン「セレーノ」
オープン

※ 漁師の娘さんが経営

地域に東京大学の研究室分
室があつて、そこに助教が常



レストラン・セレーノ

駐しているというのとはとても
すごいことだと思います。

しかも現在は、川添研究室
以外にも二つの研究室が分室
を置いているそうです。

こんな地域づくりができた
らしいなあと思いました。が、
よく考えたら田根でも似たよ
うなことをやってきたような
気がします。

平成一九年

「地域づくり協議会」を設立
慶應大学小林研究会とMITが
ワークショップを開始

平成二二年

小林研が空き家改修を開始

平成二三年

MIT生二名が四、六か月滞在
し、調査研究を実施

平成二六年

小林研の大学院生が六か月滞在
し、地協事務局員に就任

平成三〇年

小林研の学部生が六か月滞在
し、地協の地域活性プランナーに
就任

令和元年

交流拠点「キテハ食堂」オープン
※ 大工の娘さんが経営

加太地区は人口二七〇〇人
余りの漁師町です。中山間地
の田根とは異なる生活環境で
すが、大学とともに取り組ん
できた活動内容はとてもよく
似ています。

特に、いずれも空き家を改
修してオープンした交流拠点
セレーノとキテハ食堂は、偶
然ではありますが、大変興味

深い一致です。

ただ、加太にあって田根にないものは、地域ラボといわれる大学の研究室分室やそこに常駐する先生の存在です。

このことは、地域にとってとても大きな違いです。常に大学関係者と直接話し合いができることは、地域課題を共有する上で大変重要です。

とは言ってもすぐに分室を設置したり、先生に常駐してもらえるはずはありません。

そこで、まずは関係づくりからということで、「東京大学フィールドスタディ型政策協働プログラム」の受け入れができないかと思っています。

このプログラムは、東京大学が学生に対し、社会的課題に果敢にチャレンジするリーダー人材としての育成を行うものです。

全国の各地域が提示した社会的課題に対し、その解決の道筋を提案するため一年をかけて事前調査（活動計画立案）・現地活動・事後調査を行うそうです。

このプログラムによる学生の派遣を受けようと思うと、



フィールドスタディ報告会における発表の様子

学生に対してプレゼンを行い、学生から希望してもらう必要があります。全国各地と競い合い、選ばれる必要があります。手を挙げただけで東大生が来てくれるわけではありませんが、挑戦してみたいと考えています。

採択されると、一地域に二名から最大五名の学生が派遣されますが、今年は新型コロナウイルスの影響でオンラインによる調査の可能性ががあります。直接話し合う機会はいく限られそうですが、将来的な交流や関係づくりの第一歩となればと思います。

ぜひ田根へ！ 地域おこし協力隊

前号でも触れましたが、地域おこし協力隊とは、総務省の制度で、都市圏在住の若者が市町村からの委嘱を受けて地域活性化の支援を行う人たちのことです。

委嘱期間は最長三年で、その後は市内に定住することが求められています。

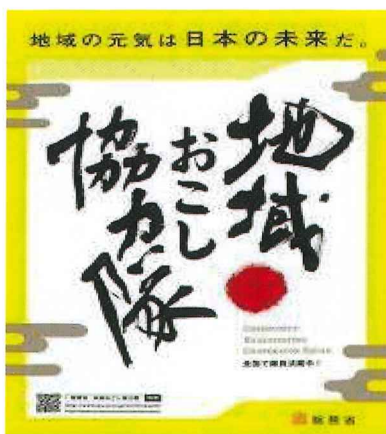
長浜市でも六年前から取り組んでいて、旧伊香郡を中心にして都会の若者が移り住み、農林業をはじめ様々なテーマで地域活動を行い、退任後は多くの人が市内に定住されているそうです。

もし、次年度以降に新規募集があり、その中に田根の取り組みに関心を持ってくれる人がいたなら、慶應大学や東京大学の学生さんたちといっしょに、空き家活用のシステム化や大学・企業との交流事

業の企画や運営などを担っていただけだと思います。

三年という時をかけて、田根の明るい未来図を描き、その後は田根の住民として未来図を現実のものにするため活躍いただくことを期待しています。

もちろん、もともと田根に暮らす私たち自身が最も積極的に活動する必要があることは言うまでもありませんが。



求められる関係人口・交流人口

ちょうど一年前のことですが、平成三〇年度に田根小の児童を対象に開催したプログラミング教室「田根みらい塾」で講師をしていたいただいた当時の慶応大学院生からメールをいただきました。

「修士課程を修了するので、これまでの御礼を伝えたくて連絡しました」とのこと。

「田根みらい塾」が終わった直後から、米国シリコンバレーでインターンシップをするということは聞いていましたが、

「私は地域資源から得る『美しさ』の客観的な定義づけとその暫定的な指標の開発について研究しました。そのきっかけは田根で見た景観でした。私には田根の景観がとても美しく見えたので、その美しさを定義し指標にすることで、経済的評価であるGDPでは測れない『地域資源』を評価しようと思いました。将来的にその指標に投資ができればと考

えており、多くの指数を算出している「S&P Dow Jones Indices」というアメリカの会社に就職します」とのことでした。

あのダウ・ジョーンズ社です。彼女は筑波大学卒業後、世界有数のコンサル会社「アクセンチュア」に就職。その後、さらに勉強したいと三年で退社し、慶応大学院に入学。昨年三月、修士課程を修了し、外資金融会社ダウ・ジョーンズ社に就職されたということでした。

「田根みらい塾」では、彼女の紹介でフェイスブックやポートデスクといった超一流企業の社員から子どもたちに講演をしていただきました。今思えば、とても恵まれた講師からプログラミングを習ったことになりました。

もう一人の講師の慶応大学院生も建築デザインの修士課程を修了しました。彼女は就職せず、慶応大学に

残り、今度は美術史研究の修士を目指しています。

「建築をデザインするより、歴史を伝えたり、その継承のあり方を考えることに興味があると気づかせてもらった田根での経験が、デザインから美術史という新たな道に私を導いてくれました」とのこと。

私たちには当たり前の風景や暮らしが、都会で暮らす彼女たちにとっては進路を変えるほど新鮮で刺激的な出来事だったようです。

逆に、私たちにとっては彼女たちの生き方や考え方がとて



も魅力的です。新型コロナの影響がなければ、昨年の体験型交流事業にも参加する予定でしたが、残念です。

ただ、彼女たちが田根にとっても大切な関係人口であることは間違いありません。

全国的に少子高齢化や過疎化が進む中、田根で暮らすことはなくても、遠くから応援してくれる人々の存在が必要です。様々な立場の人や団体との交流を深め、関係を築いて、数字には表れない関係人口や交流人口を創出する取り組みが求められています。